

# カイロ団長

宮沢賢治

青空文庫



あるとき、三十疋ひきのあまがえるが、一緒いっしょに面白おもしろく仕事をや  
つて居おりました。

これは主に虫仲間からたのまれて、紫蘇しその実やけしの実をひろ  
つて来て花ばたけをこしらえたり、かたちのいい石こけや苔こけを集めて  
来て立派なお庭をつくつたりする職しよばい業いでした。

こんなようにして出来たきれいなお庭を、私どもはたびたび、  
あちこちで見ます。それは畑まめの豆まめの木の下や、林ならの榎ならの木のの根も  
とや、又またあまだ雨垂あまだれの石のかげなどに、それはそれは上手かあいに可愛かあいらし  
くつくつてあるのです。

さて三十疋は、毎日大へん面白くやっています。朝は、黄金きん

いろ色のお日さまの光が、とうもろこしの影法師かげぼうしを二千六百寸も遠くへ投げ出すころからさつぱりした空気をすばすば吸って働き出し、夕方は、お日さまの光が木や草の緑を餡あめいろ色にうきうきさせるまで歌ったり笑ったり叫さけんだりして仕事をしました。殊ことにあらしの次の日などは、あつちからもこつちからもどうか早く来てお庭をかくしてしまつた板を起して下さいとか、うちのすぎごけの木が倒たおれましたから大いそぎで五六人来てみて下さいとか、それはそれはいそがしいのでした。いそがしければいそがしいほど、みんなは自分たちが立派な人になつたような気がして、もう大よろこびでした。さあ、それ、しつかりひっぱれ、いいか、よいとこしよ、おい、ブチユコ、縄なわがたるむよ、いいとも、そらひっぱ

れ、おい、おい、ビキコ、そこをはなせ、縄を結んで呉れ、よういやさ、そらもういき、よおいやしや、なんてまあこんな工合ぐあいです。

ところがある日三十疋のあまがえるが、蟻ありの公園地をすつかり仕上げて、みんなよろこんで一まず本部へ引きあげる途とちゆう中で、一本の桃ももの木の下を通りますと、そこへ新らしい店が一軒けん出ていました。そして看板がかかって、

「舶来はくらいウエスキイ 一杯ぱい、二厘半りん。」と書いてありました。

あまがえるは珍めずらしいものですから、ぞろぞろ店の中へはいつて行きました。すると店にはうすぐらいとのさまがえるが、のつそりとすわって退くつそうにひとりでべろべろ舌を出して遊んで

いましたが、みんなの来たのを見て途方もないいい声で云いました。

「へい、いらつしやい。みなさん。一寸ちよつとおやすみなさい。」

「なんですか。舶来のウエクーというものがあるそうですね。どんなもんですか。ためしに一杯の吞ませて下さいませんか。」

「へい、舶来のウエスキイですか。一杯二厘半ですよ。ようござんすか。」

「ええ、ようござんす。」

とのさまがえるは粟あわつぶをくり抜いたコップにその強いお酒を汲くんで出しました。

「ウーイ。これはどうもひどいもんだ。腹がやけるようだ。ウー

イ。おい、みんな、これはきたいなもんだよ。咽喉のどへはいると急に熱くなるんだ。ああ、いい気分だ。もう一杯下さいませんか。」

「はいはい。こちらが一ぺんすんでからさしあげます。」

「こつちへも早く下さい。」

「はいはい。お声の順にさしあげます。さあ、これはあなた。」

「いやありがとう、ウーイ。ウフツ、ウウ、どうもうまいもんだ

」。

「こつちへも早く下さい。」

「はい、これはあなたです。」

「ウウイ。」

「おいもう一杯お呉れ。」

「こつちへ早くよ。」

「もう一杯早く。」

「へい、へい。どうぞお急せきにならないで下さい。折角せつかく、はかつたのがこぼれますから。へいと、これはあなた。」

「いや、ありがとう、ウーイ、ケホン、ケホン、ウーイうまいね。どうも。」

さてこんな工合で、あまがえるはお代りお代りで、沢山たくさんお酒を呑みましたが、呑めば呑むほどもっと呑みたくなくなります。

もつとも、とのさまがえるのウイスキーは、石油缶かんに一ぱいありましたから、粟つぶをくりぬいたコップで一万べんはかつて、一分もへりはしませんでした。

「おいもう一杯おくれ。」

「も一杯お呉れつたらよう。早くよう。」

「さあ、早くお呉れよう。」

「へいへい。あなたさまはもう三百二杯目でございませうがよろしゅうございますか。」

「いいよう。お呉れつたらお呉れよう。」

「へいへい。よければさし上げます。さあ、」

「ウーイ、うまい。」

「おい、早くこつちへもお呉れ。」

そのうちにあまがえるは、だんだん酔よがまわつて来て、あつちでもこつちでも、キーイキーイといびきをかいて寝ねてしまいまし

た。

とのさまがえるはそこでにやりと笑つて、いそいですつかり店をしめて、お酒の石油缶にはきちんと蓋ふたをしてしまいました。それから戸棚とだなからくさりかたびらを出して、頭から顔から足のさきまでちやんと着き込んでしまいました。

それからテーブルと椅子いすをもつて来て、きちんとすわり込みました。あまがえるはみんな、キーイキーイといびきをかいています。とのさまがえるはそこで小さなこしかけを一つ持つて来て、自分の椅子の向う側に置きました。

それから棚から鉄の棒をおろして来て椅子へどつかり座すわつて一ばんはじめのあまがえるの緑色のあたまをこつんとたたきました。

「おい。起きな。勘定かんじょうを払はらうんだよ。さあ。」

「キーイ、キーイ、クワア、あ、痛い、誰たれだい。ひとの頭なぐを撲なぐるやつは。」

「勘定を払いな。」

「あつ、そうそう。勘定はいくらになっていますか。」

「お前のは三百四十二杯で、八十五銭五厘だ。どうだ。払えるか。」

あまがえるは財布さいふを出して見ましたが、三銭二厘しかありません。

「何だい。おまえは三銭二厘しかないのか。呆あきれたやつだ。さあどうするんだ。警察へ届けるよ。」

「許して下さい。許して下さい。」

「いいや、いかん。さあ払え。」

「ないんですよ。許して下さい。そのかわりあなたのけらいになりますから。」

「そうか。よかろう。それじゃお前はおれのけらいだぞ。」

「へい。仕方ありません。」

「よし、この中にはいれ。」

とのさまがえるは次の室の戸を開いてその閉口したあまがえるを押し込んで、戸をびたんとしめました。そしてにやりと笑つて、又どっしりと椅子へ座りました。それから例の鉄の棒を持ち直して、二番目のあま蛙の緑青がえるの頭をこつんとたたいて云い

ました。

「おいおい。起きるんだよ。勘定だ勘定だ。」

「キーイ、キーイ、クワア、ううい。もう一杯お呉れ。」

「何をねぼけてんだよ。起きるんだよ。目をさますんだよ。勘定だよ。」

「ううい、あああつ。ううい。何だい。なぜひとの頭をたたくだい。」

「いつまでねぼけてんだよ。勘定を払え。勘定を。」

「あつ、そうそう。そうでしたね。いくらになりますか。」

「お前のは六百杯で、一円五十銭だよ。どうだい、それ位あるかい。」

あまがえるはすきとおる位青くなつて、財布をひっくりかえして見ましたが、たった一銭二厘しかありませんでした。

「ある位みんな出しますからどうかこれだけに負けて下さい。」

「うん、一円二十銭もあるかい。おや、これはたった一銭二厘じゃないか。あんまり人をばかにするんじゃないぞ。勘定の百分の一に負けろとはよくも云えたもんだ。外国のことばで云えば、パーセントに負けて呉れと云うんだろう。人を馬鹿にするなよ。さあ払え。早く払え。」

「だって無いんだもの。」

「なきやおれのけらいになれ。」

「仕方ない。そいじゃそうして下さい。」

「さあ、こつちへ来い。」とのさまがえるはあまがえるを又次の室へやに追い込みました。それから又どつかりと椅子へかけようとなりましたが何か考えついたらしく、いきなりキーキーいびきをかいているあまがえるの方へ進んで行って、かたっぱしからみんなの財布を引っぱり出して中を改めました。どの財布もみんな三錢より下でした。ただ一つ、いかにも大きくふくれたのがありました。が、開いて見ると、お金が一つぶも入っていないで、椿つばきの葉が小さく折って入れてあるだけでした。とのさまがえるは、よろこんで、にこにこにこにこ笑って、棒を取り直し、片っぱしからあまがえるの緑色の頭をポンポンポンたたきつけました。さあ、大へん、みんな、

「あ痛つ、あ痛つ。誰だい。」なんて云いながら目をさまして、しばらくきよろきよろきよろきよろきしていましたが、いよいよそれが酒屋のおやじのとのさまがえるの仕業しわざだとわかると、もうみな一ぺんに、

「何だい。おやじ。よくもひとをなぐつたな。」と云いながら、四方八方から、飛びかかりましたが、何分とのさまがえるは三十がえる力りきあるのですし、くさりかたびらは着ていますし、それにあまがえるはみんな舶来ウエスキーでひよろひよろしていますから、片っぱしからストーンストーンと投げつけられました。おしまいにはとのさまがえるは、十一疋のあまがえるを、もじやもじやかた堅めて、ぺちやんと投げつけました。あまがえるはすっかり恐れ入おそって、

ふるえて、すきとおる位青くなって、その辺に平伏へいふくいたしました。そこでとのさまがえるがおごそかに云いいました。

「お前たちはわしの酒を呑のんだ。どの勘定も八十錢より下のはない。ところがお前らは五錢より多く持っているやつは一人もない。どうじゃ。誰かあるか。無かろう。うん。」

あまがえるは一同ふうふうと息をついて顔を見合せるばかりです。とのさまがえるは得意になって又ははじめました。

「どうじゃ。無かろう。あるか。無かろう。そこでお前たちの仲間やくそくは、前に二人お金を払うかわりに、おれのけらいになるという約束やくそくをしたがお前たちはどうじゃ。」この時です、みなさんもご存じの通り向うの室の中の二疋ひきが戸のすきまから目だけ出して

キーと低く鳴いたのは。

みんなは顔を見合せました。

「どうも仕方ない。そうしようか。」

「そうお願いしよう。」

「どうかそうお願いいたします。」

どうです。あまがえるなんというものは人のいいものですからすぐとのさまがえるのけらいになりました。そこでとのさまがえるは、うしろの戸をあけて、前の二人を引っ張り出しました。そして一同へおごそかに云いました。

「いいか。この団体はカイロ団ということにしよう。わしはカイロ団長じゃ。あしたからはみんな、おれの命令にしたがうんだぞ。」

いいか。」

「仕方ありません。」とみんなは答えました。すると、どのさまがえるは立ちあがって、家をぐるっと一まわしまわしました。すると酒屋はたちまちカイロ団長の本宅にかわりました。つまり前には四角だったのが今度は六角形の家になったのですな。

さて、その日は暮くれて、次の日になりました。お日さまの黄金きん色の光いろは、うしろの桃の木の影かげ法師ほうしを三千寸も遠くまで投げ出し、空はまっ青にひかりましたが、誰もカイロ団に仕事を頼たのみに来ませんでした。そこでどのさまがえるはみんなを集めて云いしました。

「さっぱり誰も仕事を頼みに来んな。どうもこう仕事がなくちや、

お前たちを養つておいても仕方ない。俺もとうとう飛んだことになつたよ。それにつけても仕事のない時に、いそがしい時の仕度したくをして置くことが、最必要だ。つまりその仕事の材料を、こんな時に集めて置かないといかん。ついてはまず第一が木だがな。

今日はみんな出て行つて立派な木を十本だけ、十本じゃすくない、ええと、百本、百本でもすくないな、千本だけ集めて来い。もし千本集まらなかつたらすぐ警察へ訴うえるぞ。貴様らはみんな死刑しけいになるぞ。その太い首をスポンと切られるぞ。首が太いからスポンとはいかない、シュツポオンと切られるぞ。」

あまがえるどもは緑色の手足をぶるぶるつとけいれんさせました。そしてこそこそこそ、逃にげるようにおもてに出てひ

とりが三十三本三分三厘強ずつという見当で、一生けん命いい木をさがしましたが、大体もう前々からさがす位さがしてしまっていたのですから、いくらそこらをみんながひよいひよいかけまわつても、夕方までにたつた九本しか見つかりませんでした。さあ、あまがえるはみんな泣き顔になって、うろろうろうろやりました。がますますどうもいけません。そこへ丁度一ぴきの蟻ありが通りかかりました。そしてみんなが飴色あめいろの夕日にまつ青にすきとおつて泣いているのを見て驚おどろいてたずねました。

「あまがえるさん。昨日はどうもありがとうございます。一体どうしたのですか。」

「今日は木を千本、とのさまがえるに持っていかないといけない

のです。まだ九本しか見つかりません。」

蟻はこれを聞いて「ケツケツケツケ」と大笑いに笑いはじめました。それから申しました。

「千本持つて来いというのなら、千本持つて行ったらいいじゃありませんか。そら、そこにあるそのけむりのようなかびの木などは、一つかみ五百本にもなるじゃありませんか。」

なるほどとみんなはよろこんでそのけむりのようなかびの木を一人が三十三本三分三厘ずつ取って、蟻にお礼を云って、カイロ団長のところへ帰って来ました。すると団長は大機嫌だいきげんです。

「ふんふん。よし、よし。さあ、みんな舶来はくらいウイスキーを一杯いっぱいずつ飲んでやすむんだよ。」

そこでみんなは粟<sup>あわ</sup>つぶのコップで舶来ウイスキーを一杯ずつ呑んで、くらくら、キイキイと、ねむってしまいました。

次の朝またお日さまがおのぼりになりますと、とのさまがえるは云いました。

「おい、みんな。集れ。今日もどこからも仕事をたのみに来ない。いいか、今日はな、あちこち花畑へ出て行って花の種をひろつて来るんだ。一人が百つぶずつ、いや百つぶではすくない。千つぶずつ、いや、千つぶもこんな日の長い時にあんまり少い。万粒<sup>つぶ</sup>ずつがいいかな。万粒<sup>つぶ</sup>ずつひろつて来い。いいか、もし、来なかつたらすぐお前らを巡<sup>じゆんさ</sup>査<sup>わた</sup>に渡すぞ。巡査は首をシュツポンと切るぞ。」

あまがえるどもはみんな、お日さまにまつさおにすきとおりながら、花畑の方へ参りました。ところが丁度幸さいわいに花のたねは雨のようにこぼれていましたし蜂はちもぶんぶん鳴いていましたのであまがえるはみんなしやがんで一生けん命ひろいました。ひろいながらこんなことを云っていました。

「おい、ビチュコ。一万つぶひろえそうかい。」

「いそがないとだめそうだよ、まだ三百つぶにしかならないんだもの。」

「さつき団長が百粒ってはじめに云ったねい。百つぶならよかつたねい。」

「うん。その次に千つぶって云ったねい。千つぶでもよかつたねい。」

い。」

「ほんとうにねい。おいら、お酒をなぜあんなにのんだらうなあ。」

「おいらもそいつを考えているんだよ。どうも一ぱい目と二杯目、二杯目と三杯目、みんな順ぐりに糸か何かついていたよ。三百五十杯つながつて居たとおいら今考えてるんだ。」

「全くだよ。おっと、急がないと大へんだ。」

「そうそう。」

さて、みんなはひろってひろってひろって、夕方までにやつと一万つぶずつあつめて、カイロ団長のところへ帰って来ました。

するととのさまがえるのカイロ団長はよろこんで、

「うん。よし。さあ、みんな舶来ウエスキーを一杯ずつのんで寝るんだよ。」と云いました。

あまがえるどもも大よろこびでみんな粟あわのこつぶで舶来ウイスキイを一杯ずつ呑んで、キーイキーイと寝てしまいました。

次の朝あまがえるどもは眼めをさまして見ますと、もう一ぴきのとのさまがえるが来ていて、団長とこんなはなしをしていました。「とにかく大いに盛さかんにやらないといかんね。そうでないと笑いのものになってしまうだけだ。」

「全くだよ。どうだろう、一人前九十円ずつということにしたら。」

「うん。それ位ならまあよからうかな。」

「よかろうよ。おや、みんな起きたね、今日は何の仕事させようかな。どうも毎日仕事がなくて困るんだよ。」

「うん。それは大いに同情するね。」

「今日は石を運ばせてやろうか。おい。みんな今日は石を一人で九十匆もんめずつ運んで来い。いや、九十匆じゃあまり少いかな。」

「うん。九百貫という方が口調がいいね。」

「そうだ、そうだ。どれだけいいか知れないね。おい、みんな。

今日は石を一人につき九百貫ずつ運んで来い。もし来なかつたら早速警察へ貴様らを引き渡すぞ。ここには裁判の方のお方もお出いでになるのだ。首をシュツポオンと切ってしまう位、実にわけないはなしだ。」

あまがえるはみなすきとおつてまつ青になつてしまいました。

それはその筈はずです。一人九百貫の石なんて、人間でさえ出来るもんじゃありません。ところがあまがえるの目方が何匁あるかと云つたら、たかが八匁か九匁でしょう。それが一日に一人で九百貫の石を運ぶなどはもうみんな考えただけでめまいを起してクウウ、クウウと鳴つてばかりばかり倒たおれてしまったことは全く無理もありません。

とのさまがえるは早速例の鉄の棒を持ち出してあまがえるの頭をコツンコツンと叩たたいてまわりました。あまがえるはまわりが青くくるくるするように思いながら仕事に出て行きました。お日さまさえ、ずうつと遠くの天の隅すみのあたりで、三角になつてくるり

くるりとうごいているように見えたのです。

みんなは石のある所に来ました。そしててんでに百匁ばかりの石につなをつけて、エンヤラヤア、ホイ、エンヤラヤアホイ。とひっぱりはじめました。みんなあんまり一生けん命だったので、汗が<sup>あせ</sup>からだ中チクチクチクチク出て、からだはまるでへたへた風のようになり、世界はほとんどまっくらに見えました。とにかくそれでも三十疋が首尾よくめいめいの石をカイロ団長の家まで運んだときはもうおひるになっていました。それにみんなはつかれてふらふらして、目をあいていることも立っていることもできませんでした。あーあ、ところが、これから晩までにもう八百九十九貫九百匁運ばないと首をシュツポオンと切られるのです。

カイロ団長は丁度この時うちの中でいびきをかいて寝て居りま  
したがやつと目をさまして、ゆつくりと外へ出て見ました。あま  
がえるどもは、はこんで来た石にこしかけてため息をついたり、  
土の上に大の字になって寝たりしています。その影法師は青く日  
がすきとおつて地面に美しく落ちていました。団長は怒おこつて急い  
で鉄の棒を取りに家の中にはいりますと、その間に、目をさまし  
ていたあまがえるは、寝ていたものをゆり起して、団長が又出て  
来たときは、もうみんなちゃんと立っていました。カイロ団長が  
申しました。

「何だ。のろまども。今までかかってたつたこれだけしか運ばな  
いのか。何という貴様らは意い気くじ地じなしだ。おれなどは石の九百貫

やそこら、三十分で運んで見せるぞ。」

「とても私らにはできません。私らはもう死にそうなんです。」

「えい、意気地なしめ。早く運べ。晩までに出来なかつたら、みんな警察へやってしまうぞ。警察ではシュツポンと首を切るぞ。

ばかめ。」

あまがえるはみんなやけ糞くそになって叫びさけました。

「どうか早く警察へやって下さい。シュツポン、シュツポンと聞いていると何だか面白おもしろいような気がします。」

カイロ団長は怒って叫び出しました。

「えい、馬鹿者め意気地なしめ。」

えい、ガーアアアアアアアアアア。」カイロ団長は何だか変な顔

をして口をパタンと閉じました。ところが「ガーアアアアアアア」と云う音はまだつづいています。それは全くカイロ団長の咽喉<sup>のど</sup>から出たものではありませんでした。かの青空高くひびきわたるかたつむりのメガホーンの声でした。王さまの新らしい命令のさきぶれでした。

「そら、あたらしいご命令だ。」と、あまがえるもとのさまがえるも、急いでしゃんと立ちました。かたつむりの吹くメガホーンの声はいともほがらかにひびきわたりました。

「王さまの新らしいご命令。王さまの新らしいご命令。一個条。ひとに物を云いつける方法。ひとに物を云いつける方法。第一、ひとにものを云いつけるときはそのいいつけられるものの方で

自分のからだの目方を割つて答を見つけ。第二、云いつける事にその答をかける。第三、その仕事を一ぺん自分で二日間やつて見る。以上。その通りやらないものは鳥の国へ引き渡す。」

さああまがえるどもはよろこんだのなんのつて、チエツコという算術のうまいかえるなどは、もうすぐ暗算をはじめました。云いつけられるわれわれの目方は拾<sup>じゅう</sup>匁、云いつける団長のめがたは百匁、百匁割る十匁、答十。仕事は九百貫目、九百貫目掛ける十、答九千貫目。

「九千貫だよ。おい。みんな。」

「団長さん。さあこれから晩までに四千五百貫目、石をひつぱつて下さい。」

「さあ王様の命令です。引っぱって下さい。」

今度は、とのさまがえるは、だんだん色がさめて、あめいろ 飴色にすきとおつて、そしてブルブルふるえて参りました。

あまがえるはみんなでのさまがえるを囲んで、石のある処へところ連れて行きました。そして一貫目ばかりある石へ、綱を結びつつなけて

「さあ、これを晩までに四千五百運べばいいのです。」と云いながらカイロ団長の肩に綱のさきを引っかけてやりました。団長もやつと覚悟かくごがきまつたと見えて、持っていた鉄の棒を投げすて、眼をちやんときめて、石を運んで行く方角を見定めましたがまだどうも本当に引っぱる気にはなりませんでした。そこであまがえ

るは声をそろえてはやしてやりました。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシヨ。」

カイ口団長は、はやしにつりこまれて、五へんばかり足をテクテクふんばつてつなを引つ張りましたが、石はびくとも動きません。

とのさまがえるはチクチク汗を流して、口をあらんかぎりあけて、フウフウといきをしました。全くあたりがみんなくらくらして、茶色に見えてしまったのです。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシヨ。」

とのさまがえるは又四へんばかり足をふんばりましたが、おしまいの方は足がキクツと鳴つてくにやりと曲つてしまいました。

あまがえるは思わずどつと笑い出しました。がどう云うわけかそれから急にしいんとなつてしまいました。それはそれはしいんとしてしまいました。みなさん、この時のさびしいことと云つたら私はとても口で云えません。みなさんはおわかりですか。ドツといっしょ一 緒に人をあざけり笑つてそれから俄にわかにしいんとなつた時のこのさびしいことです。

ところが丁度その時、又もや青ぞら高く、かたつむりのメガホンンの声がひびきわたりました。

「王様の新らしいご命令。王様の新らしいご命令。すべてあらゆるいきものはみんな気のいい、かあいそうなものである。けつして憎にくんではならん。以上。」それから声が又向うの方へ行つて

「王様の新らしいご命令。」とひびきわたって居ります。

そこであまがえるは、みんな走り寄って、とのさまがえるに水をやったり、曲つた足をなおしてやったり、とんとんせなかをたたいたりいたしました。

とのさまがえるはホロホロ悔悟かいごのなみだをこぼして、

「ああ、みなさん、私が変わるかつたのです。私はもうあなた方の団長でもなんでもありません。私はやっぱりただの蛙かえるです。あしたから仕立屋をやります。」

あまがえるは、みんなよろこんで、手をパチパチたたきました。次の日から、あまがえるはもとのように愉快ゆかいにやりはじめました。

みなさん。あまあがりや、風の次の日、そうでなくてもお天気  
のいい日に、畑の中や花壇かだんのかげでこんなようなさらさらさらさ  
ら云う声を聞きませんか。

「おい。ベツコ。そこん処とこをも少しよくならして呉くれ。いいとも  
さ。おいおい。ここへ植えるのはすずめのかたびらじゃない、す  
ずめのとつぽうだよ。そうそう。どっちもすずめなもんだからつ  
い間違まちがえてね。ハツハツハ。よう。ビチュコ。おい。ビチュコ、  
そこの穴うめて呉れ。いいかい。そら、投げるよ。ようし来た。  
ああ、しまった。さあひつぱって呉れ。よいしょ。」





# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# カイロ団長

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>